高知大学共通教育広報誌［パイプライン］

PipeLine

40
2012.12

特集「分科会」の現場から

No.40 Contents

特集「分科会」の現場から P1~3

教養のページ
文理融合について P4~6

FD報告 大学の先生も研修やってます! P7~8

共通教育学生委員会レポート
「SPODフォーラム」に参加して P9

特集 「分科会」の現場から

分科会

高知大学の共通教育の授業は、共通教育実施機構の下にあるカリキュラム等編成部会を中心に、カリキュラム編成や毎年の開講授業が決められています。その下に、各学部から選出された先生たちで構成される各分野や科目ごとの分科会があり、開講授業の検討、自己点検評価、FDがそれぞれに行われています。

分科会には、「大学基礎論」「課題探求実践セミナー」「学問基礎論」「人文分野」「社会分野」「生命・医療分野」「自然分野」「外国語分野」「キャリア形成支援科目」「スポーツ・健康」「日本語・日本事情」があります。

秋号では、これらの分科会の活動を順に紹介していきます。

「分科会」ってご存知ですか？

社会分野分科会　西島文香（人文学部）

学生のみなさんにはおなじみの共通教育科目ですが、特に教養科目は履修登録の「悩みの種」ではないでしょうか。どの分野からどの科目を選ぼうか・・・自分の興味関心に合い、かつ授業内容や試験方法（！）などを総合して決めるのは１年生にとっては大変かもしれませんね。

教養科目は「人文」、「社会」、「自然」、「生命医療」、「外国語」という５つの分野に分類されていますが、その分野ごとに設けられた分科会で、カリキュラムを作ったりFD活動や自己点検評価活動などを行ったりしています。今回は私が分科会長を務める「社会分野分科会」をご紹介します。

社会分野分科会は人文学部、教育学部、農学部、医学部の教員で構成されますが、総勢5名という他の分科会に比べこぢんまりとした分科会です。今年度の開講科目数は43ですが、履修者数が150~200人を超える大人数の講義が多いのも特徴です。分科会では、担当者や履修状況などから開講科目数や担当体制を決めて、次年度のカリキュラムを編成していきます。

FD活動のFDは、FACULTY DEVELOPMENT（ファカルティディベロップメント）の略称で、大学教員が授業の内容や方法を改善する取り組みのことを指します。以前は、教員が相互に授業を参観して内容や方法などを検討する方式が多かったのですが、現在はそれ以外にも、授業方法の改善やグループワーク型授業の円滑な実施にむけた研修会を実施しています。自己点検評価活動では、これまで、授業時間外の学習に関するアンケートや授業評価アンケート、5・15週目アンケートなどを、主として大人数授業で実施し、授業の評価と改善策の検討を行っています。

社会分野の教養科目が大学で規定された数（ノルマ）を大きく上回って開講されていることはあまり知られていないのではないでしょうか。様々な専門の教員がそれぞれの視点と思い入れをもって学問の入り口を用意しています。様々な扉を開いて新しい世界を、そして新しい自分を発見してみませんか。

社会分野の授業紹介

平成24年度2学期「非営利法人経営論入門」

担当：岩崎保道（評価改革機構）

平成24年度2学期より「非営利法人経営論入門」を担当させていただくことになりました岩崎保道と申します。簡単な自己紹介をします。生まれも育ちも高知です。大学から大阪に移り生活の拠点は関西になりました。その後、琉球大学（沖縄県）に勤務することになり三年を過ごし、そして2012年7月に高知大学 評価改革機構の教員になりました。

私の専門は大学政策論、非営利法人経営論です。学生の皆さんには、あまり聞きなれない分野かもしれません。前者（「大学政策論」）は、大学の基本的な機能である教育活動・研究活動をいかに向上させ、どのようにして社会に貢献していけばよいか、という課題を持っています。皆さんが学んでおられる大学には、社会から大きな期待が寄せられているのです。後者（「非営利法人経営論」）は、学校法人、医療法人、社会福祉法人、NPO法人などの非営利法人の経営課題に関するものです。私たちが日常生活を営むうえで、このような法人との関わりは少なくありません。例えば、「私立学校に通学していた」「私立病院に通院した」「家族が社会福祉施設に入居した」などの関係があるかもしれません。

非営利法人の役割や期待は大きくなりつつあります。しかし、一部の法人においては社会状況の変化を受けて、安定的な経営を続けることが容易でなくなっています。「非営利法人経営論入門」では、このような点に注目して各分野の経営環境や動向について説明していきます。この講義は「入門」ですので、この分野の専門知識がなくても初歩的な段階より解説いたします。非営利法人に関心を持つ学生さんは、ぜひ受講してください。そして、非営利法人の役割や重要性について考えていただく機会にしていただければと思います。

生命・医療分科会

分科会長　野田智洋（医学部）

生命・医療分科会は旧高知大学と旧高知医科大学が統合した結果、医学部の教員が朝倉キャンパスで共通教育科目を担当する必要が生じたために「健康・医療分科会」として発足したと認識している。当時のカリキュラムでは「健康」が全ての学生によって履修されるべき「基軸教育科目」に位置づけられており、全学部の教員がオムニバス形式で担当することになっていた。そこに医学部の教員が担当する部分が加わったために、看護学科教員が8つのコースを他学部の教員と分担し、また、医学科教員が集中講義のコースを15コマ担当することになった。他に、各講座の教授が一般学生向けに話をする「教養としての医学概論」も提供しており、診療を抱えたまま朝倉キャンパスへ移動しなければならない医学科教員の大きな負担ともなっていた。

平成20年度から導入された新しいカリキュラムでは、「健康」が選択科目となったために医学科は担当から外れ、看護学科教員が教育学部ならびに保健管理センターの教員とともに講義を行っている。選択科目としての「健康」は、現在4コース開設されるだけになっており、朝倉キャンパスで開講されている生命・医療分科会として統括すべき授業科目数は大幅に減少している。しかし、岡豊キャンパスではスポーツ科学講義ならびに実技に加えて、今年度から医学概論Ⅰ・Ⅱが生命・医療分科会の開講科目となった。このうち、スポーツ科学講義と実技は体育を専門領域とする筆者が担当している。医学概論Ⅰならびに Ⅱの科目は、「教養としての医学概論」を引き継ぐかたちで医学科と保健管理センターの教授がオムニバス形式で担当している。

分野の教育目標は、健康の保持増進のために、医学や環境保健学、スポーツ科学などの知識や技能、態度を身に付けるとともに、人の生死や生命倫理に関する諸問題について、自ら判断できる能力と態度を育むことである。目標を達成すべく各教員が協力して、当該授業の質の向上を図るよう努力している。授業の内容・方法を改善するために、学生による授業評価アンケートを実施して問題点を把握し、授業者にフィードバックすることが分科会活動の柱の一つである。

「健康Ａ」、Ｂ、Ｃならびに Ｄは、朝倉キャンパスで木曜日に開講されており、教育学部、医学部看護学科、保健管理センターの教員がそれぞれの専門分野に近い内容をテーマとして分担して講義を行っている。特に、一人暮らしを始めたばかりの大学生に必要なアルコールや喫煙による健康被害、食、運動、睡眠などの生活習慣と健康との関連、メンタルヘルスなどの知識を身につけさせることによって、健全で実り多い学生生活を送ることができるよう配慮してきた。

岡豊キャンパス開講のスポーツ科学講義は、平成23年の2学期から新しい教育方略であるTBL（Team Based Learning）を全面的に導入し、学生が一方的に聞くだけの受動的学習ではなく、学生同士であるいは学生と教員が議論しながら知識を身に付ける能動的学習に取り組んでいる。取り扱うテーマは医学部の学生向けにカスタマイズされており、ドーピング問題や子どもの体力低下、障害者スポーツ、身体変工とエンハンスメントなど、将来、医療従事者として働く上で知っておいてもらいたい知識を身に付けてもらえるよう工夫している。また、スポーツ科学実技のうち「動きづくり」でも、患者さんが感じる痛みや違和感、不調などに共感する能力や態度を身に付けさせる目的で、大学入学までに全くやったことのない運動課題に取り組ませ、身体的不自由を味わわせる授業を行っている。

平成24年度 看護学科1年生対象「スポーツ科学講義」一斉回答（2012/11/5）

医学概論Ⅰは、主に基礎系講座の教授が、医学概論Ⅱは臨床系講座の教授が担当し、学生に医学・医療への興味や関心、知的好奇心を喚起するための科目と位置づけられた。内容は各講座に任されており、研究領域の最新のトピックや研究の意義、魅力などが語られ、医師になるためのモチベーションを維持することに貢献している。

教養のページ

文理融合について

人文学部　武藤整司

はじめに

2012年度の2学期、共通教育の初年次科目である「学問基礎論」を、自然地理学専攻の杉谷隆教授とともに開講することになった。題目は『「文理融合」入門』である。杉谷さんから声を掛けられたとき軽い気持で引き受けたが、いざ考えてみるとだいぶ難しい課題であることに気づいた。だいいち、わたしはまったくの理科系音痴なので、そもそも「融合」以前に問題がある。もっとも、相棒が「行くとして可ならざるはなし」の杉谷さんのことだから、理科系の方は全面的に彼に任せて、わたしは文科系に専心すればよいという逃げ道もあるにはある。それに、ファウスト博士ではないが、あらゆる分野の学問に精通することは、およそ学問に対して敬意を抱いている者の見果てぬ夢であろう。したがって、この際、学問全体の大雑把な見取り図を点検するつもりで、「学問」という深い森に潜入しようと思い立ったのである。

パスカルの「幾何学の精神」と「繊細の精神」

ブレーズ・パスカル（Blaise Pascal, 1623-1662）という人物をご存じだろうか。フランスの数学者・哲学者で、「人間は考える葦である」という言葉を遺している。この寸言は、この人の草稿を死後まとめて本にした『パンセ』に出てくる一節である。その同じ本に、「幾何学の精神」と「繊細の精神」が対比的に扱われている個所がある。両者の間には、いったい、どういう違いがあるのだろうか。パスカルの趣旨をかいつまんで箇条書きにしてみよう（前田陽一／由木康 訳を少し改変した）。

1．幾何学の精神とは、まず対象を論じるにあたって、定義を行い、原理に従って現象を推理し、探求しようとする精神である。

2．繊細の精神とは、対象を、少なくともある程度までは、推理の運びによってではなく、一遍に、そして一目で見なければならないのである。

3．ある種の繊細な精神の人々が幾何学者でないのは、彼らが幾何学の原理の方へ向くことがまったくできないからである。

4．幾何学者が繊細でないのは、彼らが幾何学のはっきりした粗い原理に慣れていて、それらの原理をよく見て、手に取ったのちでなければ推理しない習慣なので、原理をそのように手に取らせない繊細な事物にぶつかると途方に暮れてしまうのである。

幾何学の精神
繊細の精神

わたしは、誰もが試みるように、この「幾何学の精神」を「理科の精神」に、「繊細の精神」を「文科の精神」に置き換えてみたい。パスカルがそのような構想を持っていたかどうかは不明だが、両方の精神に習熟することが学者としての理想で、片一方だけではとかく偏見と独断に陥りやすいと喝破していたのではないだろうか。パスカルが17世紀の人ということを考慮すれば、このような指摘は刮目に値する。なぜなら、理科・文科の区別はそもそも近代の慣習であり、むしろ圧倒的に文科系の学問が席捲していた時代だからである。それでは、ヨーロッパの中世の学問状況を概観してみよう。

教養のページ

中世の自由七科と現代の副専攻制度

中世の自由七科と現代の副専攻制度

中世の大学は、神学、法学、医学が学問の根幹をなし、それ以外は「自由七科」として扱われた。いわゆる「三科」の論理学、文法、修辞学、「四科」の幾何学、代数学、天文学、音楽である。学生は上記の学部に進む前に、自由七科で基礎的な学問を学び、教養を積むのである。三科が文系、四科が理系に当たるが、どちらも大切とされ、優劣はなかった。もちろん、現代の学生も、高校時代に、数学や理科などの理科系科目、国語や外国語や社会科などの文科系科目を一通り学んだ上で大学に入学してくる。したがって、ヨーロッパの中世と状況はあまり変わっていない。もっとも、学年が上がって専門性が高くなればなるほど、文科と理科では研究する対象も方法も著しく異なってくる。アメリカの大学では、そのような専門性の弊害を防ぐために、「副専攻」制度を敷いている。専門分野以外に別の分野もある程度まで修めるという制度は、日本にはまだ定着していない。ただし、東京大学大学院農学生命科学研究科でその試みがすでに始まっている。「文理融合」とは少し観点が違うが、「自由七科」の精神が活かされているとは言えないだろうか。なお、「副専攻制の趣旨」が求めている学生像は、「複眼的思考能力を身につけた社会のオピニオンリーダー」である。実態は判然としないが、複雑な現代に対応していく制度として大いに期待がもてると考えられる。もっとも、「虻蜂取らず」になる危険性はいつもつきまとうので、ただちに楽観視することができないことは言うまでもない。

万能人としてのレオナルド・ダ・ヴィンチ

それでは、上で語られている「複眼的思考能力を身につけた社会のオピニオンリーダー」とはいかなる人間像を想定しているのだろうか。わたしが連想するのは、ルネサンス期イタリアのレオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci, 1452-1519)である。彼は、「万能人 (uomo universale)」という称号が与えられているように、芸術家としての側面と科学者としての側面を併せ持っていた人である。言い換えれば、自然と人間を、科学と芸術とが融合する分野で探究した人である。「モナ・リザ」などの傑作を遺したその同じ人が自然科学に通暁していたわけであるから、驚嘆に値する人と言えよう。もちろん、彼の試みは近代科学とは無縁だったかもしれないが、その精神は、まさしくパスカルが掲げた「幾何学の精神」と「繊細の精神」の奇跡的な融合だったのではないだろうか。

それでは、現代のレオナルド・ダ・ヴィンチとして、どんな人物を想定すればよいのだろうか。まず、何か理科系の学問を専門的に身につけた人でなければならないだろう。しかも、その専門と称する分野に縛られることなく、自由な発想に基づいて対象を見つめ直すことのできる人でなければならない。学問を競争としてのみ捉えると、得てして誤謬に陥りやすいのではないだろうか。つまり、さまざまな観点を考慮に入れて、自分の行おうとしていることは果たして正しいことなのかどうかを、見抜く能力がなければならないのである。

おわりに

世界は混沌とし、退歩し、技術はますます余計なものを拵え、世の中は便利の押しつけに満ち、快適な生活空間と引き換えに自然はだんだんと滅んでゆく、とわたしは考えている。そんなわたしの考えを世間が受け容れるはずがないとは思っているが、たとえ一億人の反対者がいようとも、そう主張したい。

さて、そのような前提に立った場合、どんなかたちで「文理融合」を摸索すればよいのだろうか。それに少しばかり答えることで、この駄文の締め括りとさせていただこう。なお、うろ覚えの話であるが、その点をご海容いただきたい。

イギリス人とインド人と中国人が旅をしていると想像してもらいたい。ある日、彼らの目の前に滝が現れた。すばらしい瀑布である。そのとき、彼らはそれぞれ何を思ったのか、という話である。イギリス人は、この水量からするとどのくらいの発電量が見込めるのかと考えた。インド人は、この滝の深奥にはさぞかし偉い神が住まっているに違いないと考えた。中国人は、この滝の脇に庵を結んでお茶を飲んだらよかろうと考えた。そして、それぞれ考え方はまったく違うが、互いの発想を尊重し合った、という話である。文理融合への第一歩は、この話にヒントがあると思う。科学と信仰と文学が混然一体となったとき、見えてくる何かがあるはずである。

万能人としてのレオナルド・ダ・ヴィンチ

大学の先生も研修やってます！

共通教育実施機構 FD 部会長
立川　明

高知大生の皆さん、大学の授業を有意義なものにしていますか？　4 年間（または 6 年間）の積み重ねは大きいですよ。大学の先生は、最近の皆さんの学ぶ意欲がないことや、わからないことをそのままにして自分で何とかしようとしない様子を嘆いています。一方学生の皆さんはどうでしょう。声を大にして言いたいことがあるのではないでしょうか？　そうだとしても「先生の話を聴こう！」と準備万端整えて教室に来ているのでなければ、ボタンを掛け違ったまま時間が過ぎていきます。大変もったいないことです。皆さんにとってつまらないと思う授業であっても、聞いていて損はありません。立派な社会人は「無駄な知識はない」と断言しますし、長期間のインターンシップを経験した皆さんの先輩も、知識のなさや技術のなさを実感して学びのスイッチが入るようです。

ではどうすれば良いでしょうか？　「チームワーク」の専門家からお聞きした話を一つ皆さんに紹介します。　「変えられるのは **“今の自分”** だけ」　何をどうやっても人の性格や行動を変えることはできません（影響を与えることはできます）。過去も変えられません。変えることができるのは今の自分だけと言う事です（明日突然変わるなんて事もあり得ません）。4 年間（6 年間）を有意義なものにし、なおかつ就活で、国家試験で苦労しないですむようにするためには、今の自分を変えるべくアクションを起こすしかありません。

先生は日々授業の準備に時間をかけ、少なくとも一生懸命皆さんにわからせようと話をしています。1回の授業のためにおそらく2時間程度は「予習」をして教室に向かっていることと思います。皆さんは一つの授業のために週何時間準備をしていますか？　復習は？　期末試験で楽をするために簡単なことは、予習、復習を毎回欠かさないことです。ですが、多くの大学生はほとんど授業時間外に学習時間をとっていません（東大調査）。この積み重ねのため、実習や演習が始まると勉強し直しが始まり、進学のために勉強し直しが必要になり、就活すれば面接で中身のあることが言えません。このままで良いのでしょうか？

このような教員と学生のギャップを埋めるために先生は研修を受けています。もちろん希望する先生が参加しますので、全員が同じ研修を受けるわけではありません。本年は1学期に、先生がどんな研修を望んでいるか調査（ニーズ調査）しました。結果は以下の通りです（表1）。回答率は回答者数に対する回答数（複数回答可）の比率で、%で表しています。回答率の高かった項目は順に「動機の低い学習者に教える方法」（50%）、「大人数講義を魅力的にするテクニック」（46%）、同率で「レポートの書き方の教え方」、「効果的なグループワークの技法」（43%）となりました。先生は皆さんの受講態度を見て動機が低いと感じ、大人数授業を受ける皆さんを見てなやんでいるようです。レポートの採点をしてはがっかりし、何か授業を変える方法はないものかと思案しているようです。

高知大学では、毎年 10 講座を超える教員向け研修を開講し、先生の参加を募っています。本年は 9 月 3 日の「学生の学びを支援する授業の準備」に始まり、「講義に小グループ・ペア学習を取り入れた授業デザイン ～考え方と進め方～」、「自習を助ける教材を創る・発信するための PowerPoint＆Moodle 入門」、「成績評価とフィードバック ～評価の原則からルーブリック評価まで ～」、「秋季 TA 講習」を9月中に行いました。1月には「学生の学びを引き出すためのシラバスの書き方」、3月には春季の研修として「アクティブ・ラーニング ～学生参加型授業のつくり方」、「初年次科目のためのグループワークの技法」、「能動的学習支援者必須！グループワークのためのファシリテーション入門」、「春季 TA 講習」が予定されています。共通教育実施機構では、アンケート調査の結果を受けて、予定されている研修にないものでニーズの高い内容の研修について開講を検討します。

このような教員が対象となっている教育に関する研修を、FD と呼んでいます。FD とは、Faculty Development の頭文字をとったものです。直訳すれば「能力開発」ですね。教員にとっての能力開発と言うことで、皆さんの成績や能力を効果的に向上させるための授業手法を学んだり、皆さんが効果的に知識や能力を身につけて、社会で求められる人材になれるよう授業の集合体であるカリキュラムをよくするための手法を学んだりします。今回ニーズ調査をしたものはどれも授業改善に関するものばかりですが、これが FD の全てではありません。

FD では、「記憶」のメカニズムを学んだり、協同学習の要素を学んだり、実践例をみたりしながらワークショップ形式（実際にやってみる手法）で学びます。コミュニケーションの基本は「伝えたいことは相手が受け取ったようにしか伝わらない」です（ご存じでしたか？）。「教育」を良くしようよ！と言う事を学ぶのに、一方的に話をしたのでは頭の中は「？」でいっぱいになるばかりです。参加者が同じ体験をすれば共通理解を得る可能性はただ話を聞くより数倍高くなります。「こうやれば効果がある」という話を聞くよりも、実際にやってみた方が理解も早い上に、どうやってやったら良いか（やり方）も分かりますので、より実践的です。

「変えられるのは今の自分だけ」です。先生は授業のための準備をし、授業のやり方を工夫して望んでいます。自分では経験のない手法を授業に取り入れるために、研修を受けています。皆さんの様子を嘆くのではなく、何とか皆さんの知識を増やし、能力を高めたいと日々悩んでいます。皆さんから見て特に工夫もなく意欲も感じられない先生もいるでしょう。それを嘆いても何も変わりません。皆さんも先生に負けないよう、シラバスを熟読し、予習・復習を必ずやるようにしてみましょう。そうすれば知識も増え、あらかじめ課題も見えてきますから今までつまらないと思っていた授業が楽しくなるはずです。皆さんが単位を取りやすそうな授業を選んでとっている間は、何も変わりませんし何も言う資格はありません。まずは自分の行動を変えてみることですね。進学・資格取得・就活に成功して笑顔で卒業できるために！

研修内容	回答率（%）
1 授業計画について	
15回の授業デザイン、各回の授業の組み立てかた	7
時間外学習を促すシラバスの書き方	18
成績評価の方法（目標の設定と評価）	18
ルーブリック評価シートの作成と成績評価	29
成績評価の厳格化・ぶれない成績評価法	25
2 教育効果について	
「記憶」のメカニズムと効果的学習方法	14
大人数講義を魅力的にするテクニック	46
協働学習の基本	21
3 スタディースキルについて	
「レポートの書き方」の教え方	43
「プレゼンテーションの方法」の教え方	25
「日本語技法」の教え方	11
「情報処理の方法」の教え方	11
4 授業の雰囲気づくりについて	
教室の雰囲気を変えるクラスルームコントロール術	39
学生を眠らせない講義法のコツ	32
動機を高める第1回目の授業づくり	32
動機の低い学習者に教える方法	50
講義のための話し方入門	25
5 学生が参加する授業づくりについて	
効果的なグループワークの方法	43
講義を少しだけ参加型にする手法	39
進度を落とさずに共同学習を行う手法 チーム基盤型学習（TBL）	36
初年次科目のためのグループワークの技法	18
グループワークのためのファシリテーション入門	14
6 IT活用について	
見やすいPowerPoint資料の作り方	36
プレゼンテーションのコツ	32
時間外学習を支援するためのオンライン学習支援システム、Moodle、授業収録装置の使い方	18
7 学生の支援について	
学生の自立を促す学生支援の実践とコツ	29
障がい学生に対応した授業方法入門編	11
ティーチング・ポートフォリオ開発ワークショップ	18

表1　ニーズ調査の結果

共通教育学生委員会レポート

「SPODフォーラム」に参加して

今回は共通教育学生委員会の活動の一環として、平成24年8月23日(木)、24日(金)に行われたＳＰＯＤフォーラム２０１２について報告したいと思う。ＳＰＯＤフォーラムは大学の教職員の方々の研修フォーラムで今年で４回目になり、今回は徳島大学で開催された。1年生6人、2年生3人がその中の四国キャンパス元気プロジェクト２０１２という学生主体のプログラムに参加してきた。学生委員会２年は、このプロジェクトの企画立案から携わり、２年はプロジェクトを受け持つ側、１年はプロジェクトに参加する側として今回のフォーラムに参加した。四国キャンパス元気プロジェクト２０１２ではさまざまな大学から集まってきた学生が意見を出し合うこと、ＳＰＯＤに集う教職員の方々と意見交換する事などを通じて、学生が教職員と協働しながら、大学での新たな取り組みを企画し、教職員の方々とともに実施できるようになるためのマインドづくりを目指すことを目的として、今回のプロジェクトを企画した。

今回１年はＳＰＯＤフォーラムが初めての参加ということだったが、その中で多くの人と関わり、たくさんのことを学ぶことができた。このフォーラムの中で教職員の方と交流を持つ場面がいくつかあった。初めは戸惑いを感じていたが、教職員との会話を通して、普段の生徒間だけの大学生活では感じることのできない様々な価値観に触れることができ、また、教職員の多方面からのアプローチによって、自分自身では気付かない自分の姿を知ることができた。他大学の学生とのグループワークにおいても、多様な意見を集めることは比較的簡単であるが、その意見を整理し、納得する決定に至るまでには相当な時間がかかることを学んだ。

今回２年は他団体の３・４年生とプロジェクトを企画させて頂いたのだが、企画では苦労することも多かった。しかし、教職員の方の援助があったおかげでこの企画もやり遂げることができた。普段の大学生活で自分たちが「何かやりたい」そう思った時に、教職員の方々の存在は、様々な面でとても大事だということが、この企画を行ったことによって改めて分かった。この企画を進めていく中でも、企画をともに悩んで下さる担当の教職員の方がいてくださった。私たち学生の目線や、経験値から構成されていく企画は詰めが甘く、何度か指摘を受けた。その教職員の方がいたからからこそ、参加者によりよい企画が提供出来たのだと感じる。私たちは実際にこのようなことを体験してきているが、今回のフォーラムの参加者の中にはあまり教職員の方々と関わる機会を持っていない学生も多くいた。そのようなことから、自分たちは教職員の方々と関わる機会があり、そしてお世話になっているのだということを感じさせられた。

また、このフォーラムを通して学生同士や学生と教職員などの“繋がり”を必要としている学生が多くいることを感じた。私たち学生委員会は学生がより良い大学生活を送ることができるように活動を行っている。そのため、高知大学の学生がより一層繋がれるような場を、私たちの活動の中で提供できたらと思う。

今回のＳＰＯＤフォーラムでは今、学生が何を必要としているのかを知ることができたため、今後の自分たちの活動にも活かすことができると考えている。また、フォーラムを通して他大学の学生の活動を知り、互いに意見を交わすことで、よい刺激を受けることができた。そこで今回学び、得たことを活かすため、私たちは今後のアクションとして、高知大学のキャンパスが元気になる活動を進めたいと考えている。これからの活動も教職員の方々の援助を受けながら学生委員会の活動を展開したい。そして、様々な教職員の方々との関わりを増やし、より発展した活動を行っていきたい。

編集後記

文系・理系にとらわれず、柔軟な発想と視点でものごとを観ることができる、そういう者に私もなりたい。(S.I.)

自分の研究以外の分野はなかなか知らないものだと改めて気づかされました。勉強になります。(K.N)

高知大学共通教育広報誌 PipeLine［パイプライン］No.40

発　行 / 高知大学共通教育実施機構会議
編　集 / 共通教育実施機構会議広報部会
〒780-8520 高知市曙町2丁目5-1
☎088-844-8168(学務課共通教育係)
発行日 / 2012年12月
制　作 / ㈲西村謄写堂

□広報・記事についてのご意見をお待ちしています。
Mail : gm06@kochi-u.ac.jp